

## Empathy Neglect: Reconciling the Spotlight Effect and the Correspondence Bias

Epley, Savitsky & Gilovich(2002)  
JPSP, 83(2), 300-312.

## Abstract

- 人は、恥ずかしい大失敗をすると、他人から厳しく判断される程度を実際よりも高く推測しやすい。この傾向は対応バイアスの研究に矛盾するよう見える。対応バイアスによると、観察者は他者に関して厳しめの傾向性推論を行いやすいことが知られているからだ。観察者が行為者の視点を受け入れたり、行為者の立場に立つことを簡単に行える場合には対応推論が調整されるが、行為者はそれを無視しがちであるという事実を示すことで、この一見矛盾する文献は一致する。これらの結果は、たとえ観察者が対応バイアスの知見にのっかって悪名高くこのような推論を行いがちであるとしても、行為者が観察者の傾向性推論の強さを過大に見積もる理由を説明する。

- 恥ずかしい大失敗をしてしまった後の社会的評価を怖がる傾向→評価は正しいものか?
- スポットライト効果(Gilovich, et al., 2000)
  - 自分の失敗は実際よりも厳しく判断されると思いがち (Savitsky, Epley, Gilovich, 2001)
- 基本的帰属のエラー(Ross, 1977)
  - 人は他者の行動から傾向性推論をダイレクトに行う
- 観察者が行為から(状況を考慮しないで?)傾向性に飛びつきがちであるのに、行為者が更にそれを過大に見積もるということはあるのだろうか?

## Van Boven, Kamada, & Gilovich(1999)

- 教示によって制限された行動を取った参加者に対し、自分が観察者からどう見えるかを推測してもらった。
  - 観察者は行為者が教示で制限されていることをわかっていても、行動に対応した傾向性推論を行った。更に行為者はその対応推論("自分は行動に対応した傾向性をもっていてもおられるだろう")を過大視していた。
- 行為に制限がかけられている場合—観察者はそれを考慮するが、考慮が不十分(Gilbert, 1989)であるため、行為者が対応推論を過大視するスペースはある。
- 行為に制限がかけられていない場合—行為者は他者からの評価は厳しいと推測する—なぜ?

## 本研究の目的

- 対応推論とスポットライト効果の仲裁
- 人々は状況を考慮して印象を調整することが出来るが、この調整は不十分であることが多い(Gilbert & Jones, 1986; Jones & Harris, 1967)
- 観察者が行為者に共感でき、行為者の立場にたつことができるときには調整が行われる(Regan & Totten, 1975; Storms, 1973)
- 人々は根本的に自己中心的であり、自分が他人にどのように判断されるかを予測する時に、自分自身の視点を超えることができない(e.g., Gilovich & Savitsky, 1999)
  - Focusing illusion(e.g., Schkade & Kahneman, 1998)

## 予測

- 観察者が行為者に共感したり、行為者の立場にたつことが出来る場合には、行為者に対して推論の慈善を施す。観察者が相手の立場になれないときには、今までの帰属理論の知見に基づいた対応推論が導かれる。
- 観察者は恥ずかしい思いをした行為者の視点に立てない時の方が相手に厳しい判断を下しがちである。

## Study 1

- 大学生50名
- 回答者と観察者に別れて“integrative orientation ability”の実験に参加
  - 回答者: 実験者からのクイズ(形容詞連想)に答える
  - 観察者: 防音のマジックミラーから観察
  - 正解と不正解はチャイムとブザーで知らされる
  - 観察者は《問題と解答/問題のみ》が書かれた紙を渡される
  - 回答者は回答の正誤だけをその場で知らされる

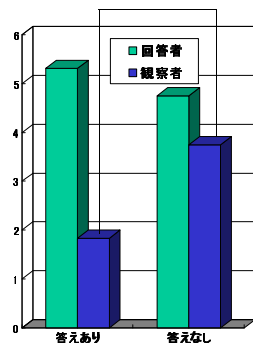
## 従属測度

- 観察者の従属測度
  - Intellectual abilityに関係する7つの次元に0~50(平均)~100で回答者を評価した
  - 自分が行為者だったらいくつ答えられたか、行為者全体の回答数の平均を推測
- 回答者の従属測度
  - Intellectual abilityに関係する7つの次元に0~50(平均)~100で観察者の評価を予測した
  - 観察者が行為者だったらいくつ答えられたか、行為者全体の回答数の平均を推測

## 結果

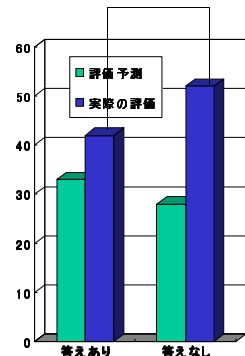
### • 成績

- 回答者の出来: 平均して10問中1.3問正解
- 自分は観察者(回答者だったらと仮定)や他の回答者よりも成績悪いと予測 ( $t(24)=7.02, 6.87, p<.001$ )
- 観察者の予測: 知識の呪いの効果がでも、答えあり/なしで程度は異なる ( $t(23)=2.46, p<.05$  答あり:3.75 答なし:1.84)
- 回答者は答えあり/なしの違いによる知識の呪効果の違いを予測できず



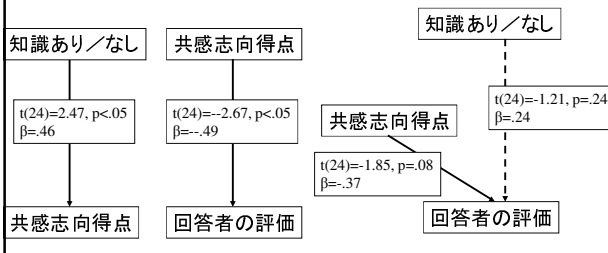
### • 印象(形容詞の評定)に関して、2(評価/評価予測) × 2(答えあり/なし)ANOVA

- 交互作用が有意  $F(1,23)=5.87, p<.05$
- 評価の主効果が有意  $F(1,23)=31.33, p<.001$
- 答えを知る観察者は知らない観察者よりも回答者を厳しく評価したが、回答者はこの評価の違いを予測できず、どちらも同じように予測していた。



### 媒介分析

- 共感志向得点 = (もし自分が回答者だったら...の正解数) - (実際の回答者の正解数)
- 答えあり(2.25) vs. 答えなし(0.69)



## 考察

- “自分は厳しく評価される”と予測する原因の一つに、相手が自分が直面している難関に共感し、それを考慮した評価をしてくれることを見過していることがあることが示された。
- 研究1の手続きだと、操作が曖昧すぎて回答者が相手の共感を予測できなかったただけかもしれない
- 研究2では被験者内デザインを実施。

## 研究2

- Ross et al. (1977)の“クイズショー”実験
  - 出題者に“一般的知識を問う問題”10問をつくらせて出題してもらい、出題者は自分の好みの問題をつくらせてしまうため、一般的知識を問うはずでも正解率は低い。
- 本実験ではクイズショー実験に観客を加えた4名1セッションの実験を行った。
  - 出題者、回答者、室内観客、室外観客
    - 室内観客: 問題の難しさ、回答者のようす、反応を観察可能
    - 室外観客: 回答者の正解/不正解のみを知らされる

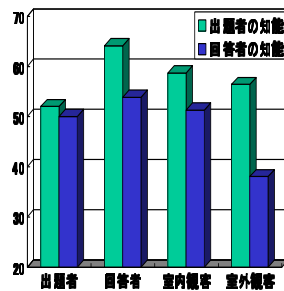
• 室外観客の方が室内観客よりも回答者の知的能力を低く評価するだろう。  
 • しかし、回答者はどちらの観客からも同程度に厳しく評価されると予測するだろう。

## 方法

- 48名の大学生が4名1セッションで実験に参加し、出題者/回答者/室内観客/室外観客に割り当てられる
  - 出題者: 正解が一つで、難しすぎず答えることが可能な問題を15分間で10個考える。
  - 回答者: 問題に答える
  - 室内観客: 観客になつたつもりで出題—回答を見る
  - 室外観客: 隣の防音ルームからマジックミラーで出題—回答を見る。正解/不正解のみ知らされる
- 従属変数: 出題者・回答者のそれぞれについて知的能力に関する評価5種類(一般的知識レベル、テスト能力、個々の事実の記憶、一般的知識のテストに答える能力、知能レベル)に対し、各0~100点で回答した(回答者は評価を予測)。

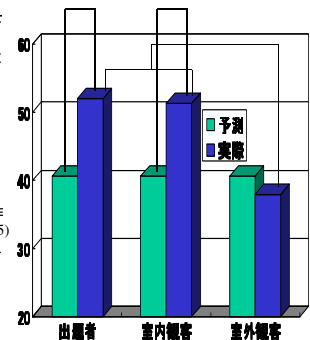
## 結果①回答者の成績と対応バイアス

- 回答者は10問中平均2.8問に正解
- 回答者は出題者よりも知的能力が低いと判定された( $F(1,11)=23.84, p<.01$ )が、交互作用が有意( $F(3,33)=8.84, p<.01$ )
  - 室外観客は出題者より回答者を最も低く評価
  - 室内観客と回答者も回答者を低く評価
  - 出題者のみ自分と回答者を同程度に評価



## 結果②回答者の印象予測と実際

- 回答者は自分が平均(50)以下と評価され、自分自身の評価(53.80)より他者からの評価は悪いと予測(40.64)( $t(11)=2.63, 3.67, p<.05, 01$ )
- 印象得点に対し2(予測/実際)×3(出題者/室内観客、室外観客)のANOVA
  - 予測/実際の主効果 ( $F(1,11)=5.51, p<.05$ )、交互作用が有意( $F(2,22)=4.73, p<.05$ )
  - 出題者と室内観客よりも室外観客の方が回答者の知的能力を有意に低く評価 ( $t(11)=4.87, p<.001$ )



## 考察

- “自分は厳しく評価される”と予測する原因の一つに、相手が自分が直面している難関に共感し、それを考慮した評価をしてくれることを見過していることがあることが再び示された。
- 観察者は行為から傾向性に飛びつく傾向があるとしても、自分が行為者の立場に簡単に立てるような場合には、その傾向を和らげる。恥ずかしい大失敗の場合にはその影響から行為者はそれほど厳しく評価されない。
- しかし、行為者自身はそれを考慮した予測を行わないため、実際よりも自分が厳しく評価されると考えるのだろう
- 代替説明: 行為者は観察者が自分に共感してくれることは気づいているが、その共感がどのように影響するかがわかっていないだけかもしれない⇒研究3で検討

## 研究3

- 参加者は行為者、観察者、ビデオ観察者分けられる。行為者は観客の前でガムをかみながらアメリカ合衆国国歌を歌わされる。観察者には行為者がガムが歌の邪魔をしていることは明らかに分かるが、ビデオ観察者にはわからない。
- 共感をさそうような操作を顕現的にすることで(研究2では顕現性が低かった)代替説明を排除

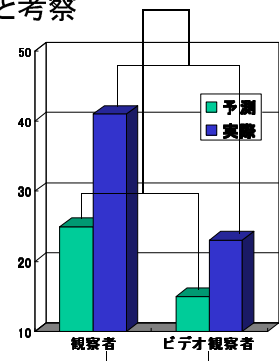
• 室外観客の方が室内観客よりも回答者のパフォーマンスを低く評価するだろう。  
 • しかし、回答者はどちらの観客からも同程度に低く評価されると予測するだろう。

## 方法

- 60名の大学生が行為者、観察者、ビデオ鑑賞者にわかれる
  - 行為者: ガムをかみながらできるだけ上手にアメリカ国歌を歌う
  - 観察者: 行為者のパフォーマンスを見る
  - ビデオ観察者: 行為者をうつしたビデオを見る(ガムについては知らされない)
- 従属測度: 行為者の歌う能力を3次元、各0~50(平均)~100点で評価(行為者自身は観客の評価を予測)

## 結果と考察

- 歌の能力得点に対し2(予測/実際)×2(観察者/ビデオ観察者)のANOVA
  - 予測/実際と観察者/ビデオ観察者の主効果 ( $F(1,19)=35.04, 18.88, ps<.001$ ), 交互作用が有意 ( $F(1,19)=7.43, p<.05$ )
  - 観察者よりもビデオ観察者の方が回答者の能力を有意に低く評価( $t(19)=5.53, p<.0001$ )
  - 行為者自身もこの違いを多少考慮できていた ( $t(19)=3.16, p<.005$ )が、全体的に自分は低く評価されると予測していた。



- 行為者は共感を誘うような文脈が顕現的であるようなときには、共感と和らげられた評価との関係を予測することができた。しかし、通常このような文脈は顕現的でないために研究1や2のような結果が出るのだろう。
- しかし、多少は共感を考慮した評価を予測できるようになったとはいえ、行為者の自分への評価の予測ははまだ正確ではない。何か別のメカニズムが別個に働いている可能性がある。⇒総合考察で検討

## 研究4

- 研究1,2,3では観察者が行為者に共感していることを操作、測定していない(そのことに言及することで影響が出てしまうと考えていたため)。研究4ではこれを具体的に操作
- 参加者に今までの3つの研究に参加していると想像させた
  - 半分にはそこで自分が行為者だったらどのように評価されるかを予測
  - もう半分には先に観察者がどの程度行為者に共感すると思うかを尋ねた後で自分が行為者だったらどのように評価されるかを予測させた。

## 予測

- 研究1,2を想像した参加者
  - 共感の程度を聞いた参加者は聞かなかった参加者よりも自分は甘く評価されると予測するだろう。
- 研究3を想像した参加者
  - 研究3ははじめから共感できる文脈が顕現的なので、うえのような差はでないだろう。
- 恥をかきような場面では自分に注目が行ってしまうため相手の共感には目が行かない(e.g., Gilovich et al., 2000)。研究1, 2, 3では明白にそれを聞くことで影響が出てしまう可能性があった。
- 人は相手の共感が自分に及ぼす影響については自覚しているが、恥をかきような場面ではそれは見過ごされたり無視されがちである。

## 方法

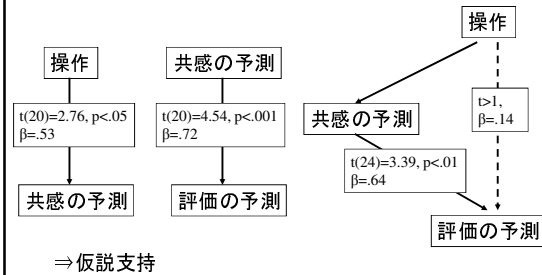
- 参加者: 大学生150名。50名ずつ研究1, 2, 3に参加していると想像してもらった。
- 参加者は各研究典型的な回答者(正答数1, 2個)、歌い手になったつもりで手続きの記述を読み、観察者から自分がどう評価されるかを答えた(半数は共感ありの観察者、残りはなしの観察者の評価を予測)。
- 共感条件の参加者は、評価を予測する前にその状況がどれほど観察者の共感を誘うものかと思うかについて1~11点で評定した。

### 結果

- 研究シナリオごとに2(共感の質問:あり/なし)×2(予測相手:共感あり/なし)のANOVAを実施
- 研究1, 2では予測通りの交互作用が有意  
( $F(3,46)=9.31, p<.01, F(1,19)=5.68, p<.05$ )
  - 共感の質問があった場合の参加者は予測相手の状況による評価の違いを正確に予測( $t(19)=2.44, p<.05$ )  
( $t(24)=6.51, p<.001$ )
  - 質問がなかった場合の参加者は予測相手の状況による評価の違いを考慮せず
- 研究3でも予測通りの結果—共感の質問ありなしにかかわらず、相手の状況による評価の違いを予測  
( $F(1,48)=117.05, p<.001$ )

### 結果

- 研究1について媒介分析を行った—観察者の共感志向が参加者の予測を媒介するかを検討



### 総合考察

- 人には他人の行動からその人の傾向性をすぐに考えてしまう傾向があることが知られている(e.g., Gilbert & Malone, 1995)。
- それなのに、行為者自身が見ている側の評定を実際よりも行動に対応すると考えてしまうのはなぜか(e.g., Savitsky et al., 2001)?どこにそんな余裕があるのか?
- 本研究からの知見—人は相手に共感する能力を持っていて、共感を誘うような場面では厳しい評価を和らげる。しかし一方、行為者自身は相手の共感を考慮した予測を行うことができないために実際よりも厳しい評価を予想するのだろう。

### 研究のまとめ

- 研究1, 2—観察者は共感を誘うような条件では厳しい評価を和らげる。行為者自身は相手の共感を考慮した予測を行うことができない。
- 研究3, 4—上記の傾向は人が共感と評価の緩和について知識がないために生じることではないことを検討
- ただし、研究3, 4のように状況が明確になることは少ないため、典型的に生じるのは研究1, 2の結果(行為者は観察者の共感を考慮できない)だと考えられる

- 観察者は単に行為者を目の前にして、厳しい評価を下しにくかっただけではないだろうか?  
⇒状況を考慮できなかったり失敗以外の手がかりがない場合には厳しい評価が下されることは実証済み(Savitsky et al., 2001)だし、本研究でも共感の手がかりがない観察者は厳しい評価を下している。
- 行為者は自分の評価を甘しくしにくかっただけではないだろうか?  
— 研究3, 4の結果と矛盾
- つまり、共感を考慮できないことが行為者自身の評価予測を誤らせている原因
- 研究3—共感のありなしの違いを考慮した予測をしてもまだなお予測は不正確。なぜか?

- 恥ずかしい失敗をした人はその失敗自体に過剰に集中してしまい、それ以外の要因を考慮した予測が出来ない(Savitsky et al., 2001)
- 人は他人に対してシニカルなものを見方をするため(ex. 人は自分よりモラルがない、状況を考慮した判断をしない, e.g. Kruger & Gilovich, 1999)、自分の判断でも相手は失敗自体しか考慮しないだろうと考える
- 失敗をしている時にはそれが自分だけが犯してしまうもので、他の人はそのような失敗をしないと考えてしまいがち(Miller & Prentice, 1994; Nisbett & Ross, 1980)—追跡調査

- 20名の大学生に14個の恥ずかしい失敗を呈示し、ここ5日間で自分が何個を経験したか、各失敗をした友人は何%くらいいると思うかを答えさせた。
  - 自分(M=76.1%)は友人(63.9%)よりも失敗したとこたえている項目が14個中11個( $t(19)=3.04, p<.01$ )  
⇒自分は人よりも恥ずかしい失敗をしかちと考えている
- 自分の失敗にはいつも気づくが、他人の失敗には気づく場合とつかない場合があるためだろう。
- 共感以外にも他者からの評価予測をゆがめる要因があるだろう。
- 他者の共感しようという動機(内面)は考慮できているが、共感を誘う状況を考慮できず?
- つまり、スポットライト効果は対応バイアスと矛盾するものではなく、いくつかの点において合致するものである